

澄禪『四国辺路日記』の検証

柴 谷 宗 叔

一 はじめに

四国遍路の本格的資料としては現存最古ともいえる澄禪（二六一三—一八〇）の『四国辺路日記』（二六五三）⁽¹⁾を詳細に読み込み、記載されている内容を検討することによって、江戸時代前期の四国遍路の実態を明らかにするとともに、現在との比較を試みた。日記に記載された行程をたどり、現地調査をすることで、地名、寺社名についてすべて現在のものに比定した。ルートについてもほぼ推定することができた。⁽²⁾愛媛県、徳島県教委などの力で古い四国遍路道の調査が試みられてはいるが、真念の『四国邊路道指南』（二六八七）⁽⁴⁾に記された以前の道は残念ながらわからなかった。真念に先立つ一六五三年当時の遍路道の詳細をたどったのは初めての試みであるといえる。

日記は当時の町の様子や生活実態まで言及しているが、今回は総括として行程、札所の様子、宿泊に絞った。

印度學佛敎學研究第六十一卷第一号 平成二十四年十二月

二 行程

承応二年（二六五三）七月十八日、高野山を出発、二十四日、阿州渭津（徳島県徳島市）に着く。持明院（廃寺、跡に常慶院滝薬師、徳島市眉山町大滝山）に泊まる。靈山寺（一番、鳴門市大麻町板東）から回るより井土寺（十七番井戸寺、徳島市国府町井戸）からの方が良いとの伝授を受ける。

二十五日、持明院を発ち井土寺に行く。観音寺（十六番）、国分寺（十五番）、常楽寺（十四番）を経て、一ノ宮（一宮神社、現在の十三番札所大日寺は道を挟んで北側）へ。「阿波一国を一目に見る」峠を越えた。サンチ村（吉野川市鴨島町山路）⁽⁵⁾の民家に一泊した。

二十六日、藤井寺（十一番）を経て、焼山寺（十二番）へ。

二十七日、民家に一宿（神山町鬼籠野あたりか）。

二十八日、恩山寺（十八番）へ。民屋に泊。

恩山寺以降は後述する例外以外は、ほぼ現在の行程と同様

澄禪『四国辺路日記』の検証(柴谷)

である。そして大窪寺(八十八番)を打ち終えた後、切幡寺(十番)から靈山寺(一番)に至り打ち終えている。

澄禪は井戸寺から巡拝を始めることについて「大師は阿波の北分十里十ヶ所靈山寺を最初にして」とし靈山寺から回り始めないことの言い訳をしている。このことから、当時すでに靈山寺を一番にして巡拝することが一般的であったことがわかる。参拝した札所に番号をつけてはいないけれど、最後に世間流布の日記として札所八十八ヶ所と記していることから、現在に通ずる番付がなされていたことは想像に難くない。一方同時に井戸寺から回るのを「中古より以来云々」として持明院から伝授を受けているので、そのような回り方もされていた、つまり必ずしも一番から回らなければならないということではないことがわかる。

他に、現在の徒歩遍路の順打ちの基本コースと異なるところを挙げる。まず、現在と番次を違えている箇所であるが、伊予国分寺(五十九番)——一ノ宮(六十二番)——香園寺(六十一番)——横峰寺(六十番)——吉祥寺(六十三番)の順に回っている。六十一番から六十四番は近くに並んでおり、六十番のみ距離が離れている所へ登山するので、現在も六十番を後回しにする行程が組まれることがある。六十一番より六十二番を先に打っているのは今治街道(現在の国道一九六号沿い)を行った場合、その方が近かったと思われる。

次に三角寺(六十五番)の奥院(仙龍寺、四国中央市新宮町馬立)に参詣している。ここは現在も難所とされ訪れる人が少ないが、あえて行っている。奥院から雲辺寺(六十六番)に至る経路は現在の一般的な遍路道とは異なる尾根道が現存することを確認した。

琴弾八幡宮(六十八番)、観音寺(六十九番)の打ち順も日記では逆となっているが、琴弾八幡と観音寺は隣接する境内であり、どちらを先にするかという意識はあまりなかったようだ。

弥谷寺(七十一番)からは曼荼羅寺(七十二番)に直行せず、大師ゆかりの海岸寺(香川県多度津町西白方)、三角寺(仏母院、多度津町西白方)、熊手八幡(多度津町西白方)などの番外札所を巡ってから曼荼羅寺に至る。また善通寺(七十五番)から金毘羅(金刀比羅宮、琴平町琴平山)を往復している。

巡拝日数は九十一日間と記している。四国内のみの勘定である。現在の四国徒歩遍路の平均的日数四十一⁽⁶⁾—五十日の二倍ほどかかっている。雨の日は逗留しているし、城下ではゆっくりするなど、現在よりは余裕を持って巡っていたことがわかる。

三 札所の様子

遍路初日に巡った、井土寺(十七番井戸寺)は「礎のみ残り」、観音寺(十六番)、国分寺(十五番)、常楽寺(十四番)は「小

さき草堂」と記され、一ノ宮（十三番）に至って初めて「殿閣結構也」という記述が出てくるが、ことごとく荒廃している様子がわかる。寂本『四国徧禮靈場記』（一六八九）でも常楽寺は「茅堂の傍一菴」、国分寺は「小堂一字」、観音寺は「堂舎廢毀」などと荒れた様子が記されている。⁽⁷⁾これらの札所は九皋主人写『四国徧礼名所図会』（一八〇〇）⁽⁸⁾に至ってやっと寺観が整っている図が載せられているが、国分寺は『名所図会』でも本堂以外はみすぼらしく描かれている。なお『靈場記』には「大日寺」という記述も出てきて一ノ宮の境内に描かれている。⁽⁹⁾

以下同様に、阿波（徳島県）の札所の記載を見ていく。藤井寺（十一番）も荒れており、再興のための勧進をしていると記されている。焼山寺（十二番）も退転。平等寺（二十二番）は「在家のよう」と記す。

吉野川北岸の十か寺は、法輪寺（九番）、十楽寺（七番）、極楽寺（二番）を「退転」と表記、熊谷寺（八番）を「衰微」としている。

阿波の札所は、二十三か寺中十二か寺が荒廃していた。その理由として考えられるのが安土桃山時代の被災である。長宗我部元親（一五三八―九九）による天正（一五七三―九二）の兵火で焼失したとみられ、寺伝等によると、靈山寺、極楽寺（二番）、地藏寺（五番）、安楽寺（六番）、十楽寺、法輪寺、藤

井寺、大日寺（一ノ宮）、常楽寺、国分寺、観音寺、井戸寺、恩山寺、立江寺（十九番）、太龍寺（二十一番）、平等寺の十六か寺が罹災している。⁽¹⁰⁾

土佐（高知県）は結構寺観が整っていたようだ。長宗我部は自領内の寺を焼き討ちにすることはなかった。澄禪の日記によると、太守（山内忠義、一六〇九―六九）の再興とされる寺が多く、工事中も含め、東寺（二十四番最御崎寺）、津寺（二十五番津照寺）、神峯（神峯神社、現在の二十七番札所神峯寺は少し下った所にある）、大日寺（二十八番）、国分寺（二十九番）、一宮（土佐神社、現在の三十番札所善楽寺は東隣）、五臺山（三十一番竹林寺）、種間寺（三十四番）、清瀧寺（三十五番）、青龍寺（三十六番）、新田ノ五社（仁井田五社、現在の三十七番札所岩本寺の北東一・五キロ）、寺山（三十九番延光寺）の十二寺社の記載がある。「太守は信心者で殊に真言家に帰依」と記されていることからわかる。また「小倉庄助（小倉勝介、一五八二―五四）に命じて悉く修造」との記載も見える。

伊予（愛媛県）の札所もかなり荒廃していた。澄禪の日記では、観自在寺（四十番）、稻荷ノ社（四十一番龍光寺）、明石寺（四十三番）、浄瑠璃寺（四十六番）、八坂寺（四十七番）、浄土寺（四十九番）、繁多寺（五十番）、大山寺（五十二番太山寺）、縣の円明寺（五十四番延命寺）、泰山寺（五十六番）、香蘭寺（六十一番香園寺）、吉祥寺（六十三番）の十二寺社が「退転」「小

澄禪『四国辺路日記』の検証（柴谷）

庵」「住持なし」等の記述となっている。

讃岐（香川県）は寺観が整っていた。荒廃していたのは、小松尾寺（六十七番大興寺）が「小庵」、出釈迦山（我拝師山、七十三番出釈迦寺＝善通寺市吉原町＝から南東二キロの山上）が「吹崩」、崇徳天皇（白峯宮、現在の七十九番高照院天皇寺は神社をはさんで右に本坊・左に本堂大師堂等）が「退転」、大窪寺（八十八番）が「本坊ばかり」と記されているぐらいである。

長宗我部元親の四国統一と豊臣秀吉の四国征伐による一連の天正の兵火は四国の寺社に大きな損害を与えた。これを含めた安土桃山時代の荒廃からの寺社の復興度合いは国によって異なる。

阿波では二十三寺社中十二か所、伊予では二十六寺社中十二か所が荒廃している様子が書かれている。一方、土佐は十六寺社すべての寺観が整っており、讃岐も退転しているのは二十三寺社中四か所にすぎない。

土佐では山内忠義が、讃岐は生駒氏をはじめとする歴代当主が再興に熱心に取り組んだ結果、澄禪の時代には復興はかなり進んでいた。それに比べ阿波、伊予では一部を除いて未着手であったことがうかがえる。その後各地で復興が進められ、寂本の『霊場記』が書かれた元禄二年（一六八九）には一部を除いて寺観が整っていることは同書の絵で明らかであるから、澄禪以後の復興であることがわかる。

四 宿泊

澄禪は七月二十四日に徳島に着き十月二十六日に巡り終えるまで九十一泊しているが、野宿は一度もない。僧侶の修行としての遍路であったが、寺院に泊まれる時は寺院で、それ以外は民家に泊まっているのである。現在は野宿する歩き遍路が多いが、澄禪は野宿しなかったというのが興味深い。

最初に泊まったのは徳島・寺町の持明院である。徳島藩は、慶長三年（一五九八）に、駅路寺の制度を定め、八か寺を指定する。遍路などの旅人に宿を貸す寺院を指定し、藩が補助する。持明院は駅路寺ではなかったが、徳島城下で同様の役割を果たす寺院となっていた。⁽¹³⁾

二十六日の焼山寺では、高野の小田原行人衆と一緒泊まったとの記述があるので、行人衆も遍路にきていたことがわかる。

以下九十一泊の内訳は、寺院四十三か所（六十二泊）、民家二十六か所（二十九泊）。国別でみると阿波寺院六、民家六（七）、土佐寺院十五（二十六）、民家十一、伊予寺院十一（十六）、民家八（十）、讃岐寺院十一（十四）、民家一となる。

澄禪は「辺路屋」という表現をたびたび使っている。

四日寺ヲ立テ一里斗往テ海部ノ大師堂ニ札ヲ納ム、是ハ辺路屋也。

爰ニ辺路札所ノ日記ノ板有り、各買之也。(中略) 廉喰ト所ニ大守より辺路屋トテ寺在リ、往テ宿ヲ借タレハ坊主慣貧第一ニテワヤクヲ云テ追出ス。

廉喰(徳島県海陽町穴喰浜)には駄路寺であつた円頓寺⁽¹⁵⁾があり「辺路屋」と記している。しかし、澄禪は住職に追い返されて泊まらなかった。駄路寺が十分に機能していなかったことがうかがえる。一方、海部の大師堂は現在の弘法寺(海陽町四方原)にあたるが、駄路寺ではなかったが、遍路宿をやっていたのだろう。

このほか、「野根ノ大師堂」(明徳寺、高知県東洋町野根)、「追手ノ門外ニ大師堂」(馬目木大師、愛媛県宇和島市元結掛)、「佐野ノ里(中略)北ノ山キワニ辺路屋」(青色寺、徳島県三好市池田町佐野)、「弥谷ノ麓辺路屋」(八丁目大師堂、香川県三豊市三野町大見)などに辺路屋の記述が見られる。青色寺は駄路寺であつたが、それ以外は小さな大師堂である。遍路を泊める堂庵を辺路屋と記したと考えられる。

遍路宿の原型は民家の宿泊でもうかがえる。

宇和島本町(愛媛県宇和島市丸之内)の今西伝介宅は、遍路修行の者とさえいえば宿を貸してくれた。今で言う善根宿の原型と言えるだろう。「無二ノ後生願ヒテ」とあるから来世の安楽を願う信仰心からといえる。

戸坂(西予市宇和町鳥坂)の庄屋・清右衛門は遍路を数回し

澄禪『四国辺路日記』の検証(柴谷)

たとある。高野山證菩提院⁽¹⁶⁾の旦那であるとも記している。この記述から一般民衆も庄屋クラスの豊かな人が遍路に出たことがわかる。それも一度ならず数回もめぐるといふ現在の重ね打ちにつながる行動がなされていた。また、高野山にも参詣したのだろう。塔頭寺院との檀信徒の関係が高野山から遠く離れた伊予の地ですであつたことがわかる。

「お接待」も既に行なわれていた。一宮の社僧・保寿寺(六十二番宝寿寺)では、新屋敷村に甚右衛門という信心家がついて、明日の朝食を接待するから来てほしいといわれ、翌朝よばれてから出発した。道隆寺(七十七番)明王院では、檀家の横井七左衛門という人から光明真言の功德などを聞かれ伝授する。「帰宅シテ手巾并ニ齋料ナト贈ラル」と礼を受け取っている。

五 まとめ

澄禪は井戸寺(十七番)から打ち始めており、日記に札所番号の記述もない。しかし当時すでに霊山寺(一番)から打ち始める風習ができていたことがうかがえる。澄禪自身は札所にこだわらなかった。

安土桃山時代の戦火の影響で荒廃していた寺社が阿波、伊予に多く見られる。土佐、讃岐では復興している様子が見える。

澄禪『四国辺路日記』の検証（柴谷）

遍路宿の原型ともいえる「辺路屋」が成立していた。寺院の宿坊的な宿や民家での善根宿もあった。澄禪自身は野宿を全くしていない。「お接待」も行われていた。

- 1 『辺路日記』の「辺」は正しくは、しんにょうに鳥の「邊」。「辺」の異体字。本論では引用文は「辺路」と表記、地の文は一般的な「遍路」を使用した。底本に塩竈神社（宮城県塩釜市）所蔵の正徳四年（一七一四）写本の影印本（高野山大学図書館所蔵）を使い、宮崎忍勝『澄禪四国遍路日記』（大東出版社、一九七七、以下『宮崎本』）、近藤喜博『四国遍路研究』（三弥井書店、一九八二、以下『近藤本』）、伊予史談会『四国遍路記集』増訂三版（愛媛県教科図書、一九九七、以下『史談会本』）を参照し校訂した。
- 2 「澄禪『四国辺路日記』の足取りの検証」（『普通寺教学振興会紀要』第十六号、二〇一一）一七九―二二七頁。「澄禪の足跡たどる 江戸前期の遍路道再現」一一二四（『へんろ』三〇六号―三一九号連載、伊予鉄不動産、二〇〇九年九月―二〇一一年八月）。
- 3 『伊予の遍路道』（愛媛県生涯学習センター、二〇〇二）、『徳島県歴史の道調査報告書第五集遍路道』（徳島県教育委員会、二〇〇一）。
- 4 底本に『史談会本』を使用。以下『道指南』。
- 5 山路の地名は、地蔵峠の麓の石井町石井にもあるが、一里の行程から吉野川市鴨島町山路が適当と考える。
- 6 拙著『公認先達が綴った遍路と巡礼の実践学』（高野山出版社、二〇〇七、以下『実践学』）二八頁。

- 7 『史談会本』一五九―一六三頁。
 - 8 『史談会本』三一―三一四頁。
 - 9 村上護『四国偏礼霊場記』（教育社、一九八七）一九二頁。
 - 10 『先達教典』（四国八十八ヶ所霊場会、二〇〇六）一五〇―一九五頁。
 - 11 拙論「四国遍路の目的意識——澄禪『四国辺路日記』と現在の比較——」（『宗教研究』八四巻四輯、二〇一一）四五〇―四五二頁。
 - 12 徒歩遍路の一二・七七％が野宿中心である。『実践学』二四―二五頁。
 - 13 三好昭一郎「徳島藩駅路寺制の展開」（『地方史研究』二五三号、名著出版、一九九五）七―八頁。
 - 14 高野山中心部に小田原谷というところがある。
 - 15 円頓寺は昭和二十一年（一九四六）の南海地震で被災、大日寺に合併された。
 - 16 證菩提院は現在、親王院に合併されている。
- 〈キーワード〉 澄禪、四国遍路、日記、江戸時代、行程、札所、宿泊
- （高野山大学密教文化研究所受託研究員）